

県立赤城公園の活性化に向けた基本構想

令和4年（2022年）

目次

1 はじめに	03-04p
2 社会的背景	05-07p
3 現状と課題	08-15p
4 コンセプト・基本方針	16-18p
5 施策方針	19p
(1)管理・運営ほか	20-25p
(2)施設整備	26-27p
6 まとめ	28-31p
7 別添	32-33p

赤城山の魅力に新たな文脈を織り込む地域デザイン。 自然のなかで、一人ひとりのウェルビーイング^{※1}を高め 新しいコミュニティとなる“ひとのつながり”を創出する。

赤城山に「行ってみたい」「友人を誘ってまた訪れたい」という思いをいかに醸成し、継続させていくか。

コミュニティを育み、赤城山の機運と熱量をいかに高め持続させていくか。

その鍵は“住む人”であり、“働く人”であり、“訪れる人”たち、そして、赤城山を愛する人たちだ。

多様な人々の交流が、あらたな変化を赤城山に生み出していく。

——ウェルビーイング、生きがい、サステナブル^{※2}。

まちの魅力を持続的に高めていくことだけでなく、市民からでも事業者からでも地域からでも、

「赤城山がある前橋って素敵」と思われるような強いコミュニティづくりを目指して、

この不確かな社会の中で、持続する地域の魅力づくりを提案する。

※1 ウェルビーイング…幸福、安寧。身体的・精神的・社会的に良好な状態。特に、社会福祉が充実し、満足できる生活状態にあること 出典：デジタル大辞泉(小学館)

※2 サステナブル…持続可能であるさま。特に、地球環境を保全しつつ持続が可能な産業や開発などについて。出典：デジタル大辞泉(小学館)

豊富な自然資源に加えて、歴史・文化的にも地域の象徴となる山頂公園

標高1,828メートル、伸びやかな裾野を持つ赤城山（あかぎやま）は、日本百名山の一つで群馬県の象徴ともいえる名山。赤城山は深い森と大小の湖沼、湿原を抱え、そこには多様な動植物が生息している。特に多くの観光客を集める山頂部は、多彩な自然環境を有しており、火口原湖の大沼（おの）、爆裂火口の跡にできた火口湖の小沼（この）、かつての古大沼湖の一部が湿原化した覚満淵（かくまんぶち）と、いくつもの外輪山が変化に富んだ美しさを見せている。

県立赤城公園は、この赤城山頂部の豊かな大自然の中に広がる、およそ1,290ヘクタールの県立公園。

公園内にはビジターセンター、キャンプ場、休憩舎や牧場などの施設があり、年間50万人ほどの利用者が訪れている。

また、大沼・小沼・覚満淵周辺や、地蔵岳・黒檜山（日本百名山）には、関東ふれあいの道をはじめ、登山道や散策道が整備されていて、四季それぞれの自然の美しさを満喫できるようになっている。



冬季は氷上ワカサギ釣りがある



6月はレンゲツツジが広がる



上毛かるたにも描かれる

左・右上提供：前橋観光コンベンション協会
右下参考：上毛かるた



基礎情報
設立 昭和10年2月8日
面積 1,290ha
標高 1,828m (赤城山・黒檜山)

画像引用元 左上：Wikipedia、右上・下：Google Earth

日本の未来課題と新しい時代に求められる“Well-Being”への新たな指標

Beyond 2060。
変化が予測できる日本の未来課題

将来推計人口でみる 2060年の日本

内閣府 令和3年(2021)版高齢社会白書より

ア 8,700万人を割り込む総人口

イ 2.6人に1人が65歳以上、3.9人に1人が75歳以上

ウ 年少人口、出生数とも現在の半分以下に、
生産年齢人口は4,529万人に

エ 現役世代1.3人で1人の高齢者を支える社会の到来

オ 平均寿命は男性84.95歳、女性91.35歳に

“心身ともに良好な状態”を意味する概念“Well-Being”
その状態を維持し向上するための指標が、世界で注目されるように



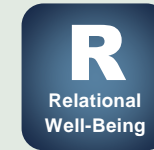
意義ある人生を送り
今この瞬間をマインド
フルに楽しんでいる



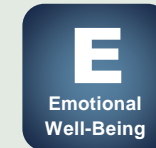
身体を大切にシカラダ
とところのつながりを
活かしている



深い学びに主体的
に関わり経験を拡
げている



自分自身と他人と
建設的な関係性を
育んでいる



すべての感情を感じ
※レジリエンスと楽観的
視点を得ている



タル・ベン・シャハー
心理学博士、教師、著述家

※レジリエンス：弾力。復元力。また、病気などからの回復力。強靱（きょうじん）さ。
出典：デジタル大辞泉(小学館)

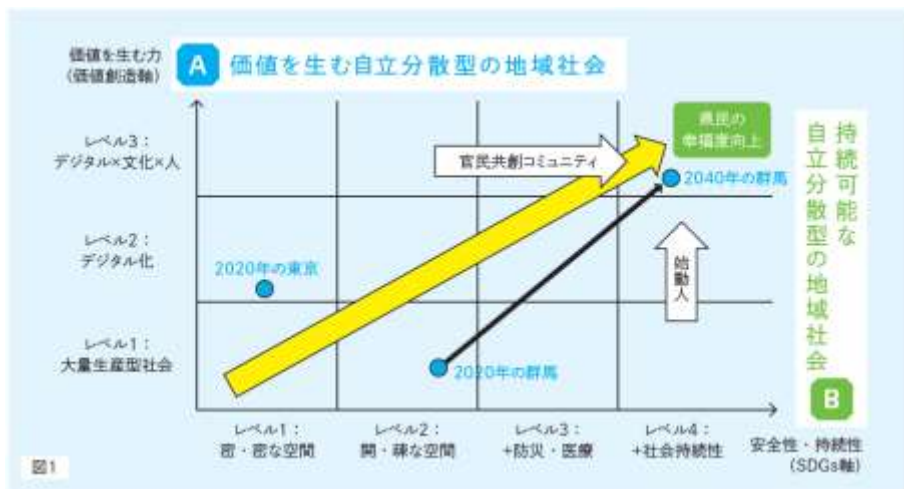
近年、世界のすべての人が取り組むべき課題として位置付けられる
“Well-Being”意識の高まり。2030年以降に向けて、新しい資本主義の
あり方が考察されている



GDW：国内総充実を表す、Gross Domestic Well-beingの略称。GDPでは捉えきれない、
社会に生きる一人ひとりのウェルビーイングを測定するための指標。

目指す姿：年齢や性別、国籍、障害の有無等にかかわらず、すべての県民が、誰一人取り残されることなく、自ら思い描く人生を生き、幸福を実感できる自立分散型の社会

< 2軸で目指す自立分散型の社会 >



< 7つの政策 > ※バックキャスト思考で描いた2040年に目指す姿の実現に向け、7つの政策の柱を設定。

	2020	2023	2025	2030	2035	2040
1 行政と教育のデジタルトランスフォーメーションの推進	[Progress bar]					
2 災害レジリエンス対応の実現	[Progress bar]					
3 国庫移管体制の強化	[Progress bar]					
4 県民生活福祉の実現	制度導入・工上げ	社会参加率の増加				
5 地域経済循環の形成	生産ミリアの拡大	県内企業への拡大				
6 官民共創コミュニティの育成	組織の工上げ	活動の拡大・深化				
7 教育イノベーションの推進と「知能人」の活躍	新たな教育の拡大	知能人の社会参加	知能人の活躍が新たな知能人を育てるにつれて政府機関			

※バックキャスト思考：目指す将来の姿や目標を定め、そこから現在の課題などの現状を分析し今何をすべきかを考える思考方法。

政策6 官民共創コミュニティの育成

長期的持続性を高めるための取組の場として、さまざまな分野で多様な「県民」の交流からイノベーションが生まれる「官民共創コミュニティ」を立ち上げていく。

- 地域課題解決**
 - 住民主体の地域活動（地域運営組織、地域づくり団体等）の促進
- 住み続けられるまちづくり**
 - 公共施設・空間の新たな活用による「居心地が良く歩きたくなるまちなか」の創出
- 観光の新たな魅力創出**
 - ニューノーマルに対応した観光地づくり

目指す姿の実現に向けた具体的な施策の実施事例として、県を代表する自然豊かな県立公園である赤城公園の活用方法を検討していく。



「官民共創コミュニティ」が100年持続する公共をつくる

今、世界中で、産学官民が多様な分野で連携し、地域の課題を解決する挑戦が進められています。ビジョンでは、こうした取組を改めて「官民共創コミュニティ」という言葉で表現しています。官民の力がつながることが、公共にイノベーションを生みます。共創の重要性を再認識し、県内各地でこの活動を加速させていきます。この中核的な拠点として県庁32階に官民共創スペース「NETSUGEN」を設置しました。



スローシティ×スマートシティを目指す前橋市の方向性と連動し、デジタル基盤整備と結びつく、自然共生エリアをデザイン



前橋市「前橋・赤城スローシティ」についての説明より

前橋・赤城地域は、平成29年5月よりスローシティ国際連盟への加盟を果たしている。地域の食や農産物の豊かさ、歴史文化や、自然環境を大切に、個性・多様性を尊重する新たなまちづくりを行っていく。



前橋市提供資料より

「スローシティ×スマートシティ」のコンセプトや、「デジタル田園都市国家構想」に基づく共助型未来都市に向け、めぶくID連携を基本とした都市サービス基盤の構築を進めていく。

赤城を中心としたスローシティやエコツーリズムの推進、めぶくID導入などのデジタル基盤整備によるスマートシティ等、前橋市の方向性との連動。また、赤城地域が持つ自然資源を活かし、差別化が容易で、発信力の高い構想へとつなげていく。



MaeMaaS取組イメージ、「MaeMaaS（前橋版MaaS）社会実装事業」概要書より

新たな取組を通じ、官民共創による持続可能な公園管理・運営を実現

県立赤城公園の現状と課題

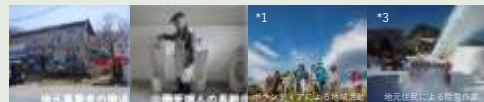
①利用スタイルの多様化

→多様化するニーズへの対応の遅れ



②地元事業者の高齢化と後継者不足

→公園運営・管理の人員不足



・新たな担い手の確保

③老朽化県有施設の維持管理費用増大

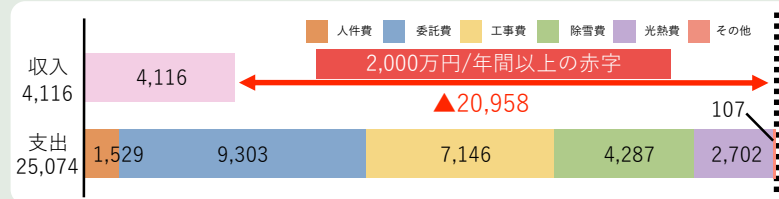
→県有施設の必要性の再確認と



維持管理財源の確保

引用：*1 NPO法人赤城自然塾 *2 (株)スノーピーク*3 須田工業

◆県立赤城公園の歳入・歳出の実績（令和元年度） 年間利用者：約55万人（単位：千円）



◆主な費用内容

人件費	・公園管理員
委託費	・ビジターセンター管理 ・公衆トイレの清掃 ・公園内の清掃、草刈りなど
工事費	・登山道、木道などの改修 ・公衆トイレの改修 ・災害対応（土砂撤去、施設復旧など） ・施設の改修 など

◆課題

- ①マンパワーの確保
- ②財源の確保

⇒課題解決に向けた取組が必要

持続可能に向けた新たな取組

①未利用の土地・空間を有効利用

ビジターセンター食堂スペースにカフェを開設

⇒条例による使用料納付により収入が増える

今後、民間事業者への積極的な貸付を推進する



②新たな担い手の確保

県立赤城公園への新たな民間事業者を募集

⇒民間事業者の進出によりマンパワーが増える

地元活動（清掃等）に積極的に参加してもらう



官民共創による持続可能な公園管理・運営体制

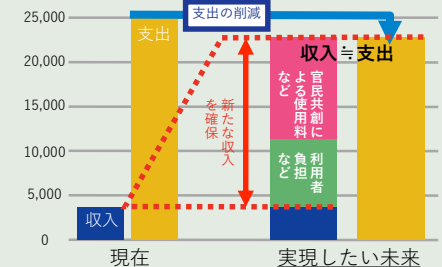
県立公園のポテンシャルを最大活用し、

新たな地域顧客を増やすための魅力を創出し、

自律性ある持続可能な公園管理・運営の実現を目指す。



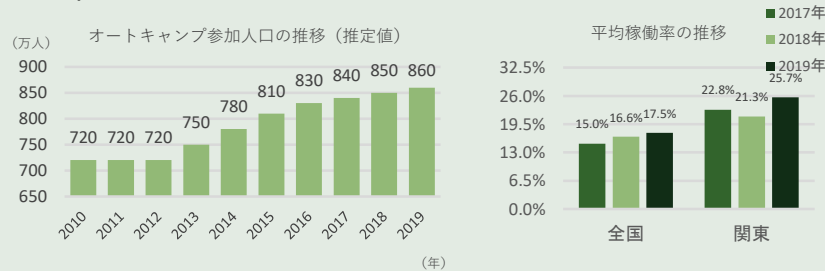
<収入と支出の改善目標イメージ>



近年需要の高まる屋外滞在を活かして、地域の循環を生み出す

年々オートキャンプ人口は増加傾向、特に関東圏ではキャンプ場不足

身近な感覚としてはキャンプブーム、社会的な影響でいえばSDGsや環境配慮への要請から屋外で過ごすことへの意識などが高まり、実際にオートキャンプに参加する人口も年々増加傾向にある。それに伴い全国のキャンプ場稼働率も上昇しており、特に関東圏では週末の予約が取れないなど需要が非常に高まっている。

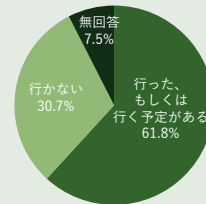


参考：『オートキャンプ白書2020』、社日本オートキャンプ協会

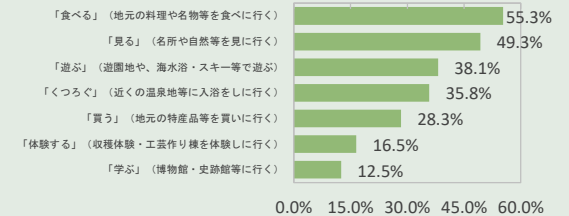
キャンプ宿泊に伴う周辺地域への波及効果

キャンプ場整備の一つのメリットとして、周辺への波及効果が挙げられる。統計によると、約6割の方はキャンプ宿泊の前後に施設周辺で観光を行っていることが見て取れる。また、キャンプは宿泊を伴う体験でもあることから消費単価も高まり、周辺地域への経済的な効果も見込まれる。提供段階から、周辺地域での体験を伴う宿泊プランとして売り出していく事も、十分に需要が見込めると考えられる。

周辺の観光地等へ行ったか (2017年調査)



キャンプ場周辺での観光等の内容 (2017年調査)

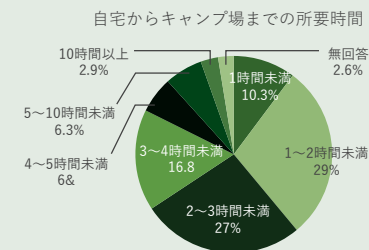


参考：『オートキャンプ白書2020』、社日本オートキャンプ協会

東京から約100km、首都圏から適度な距離感



オートキャンプ場の採算ラインの立地条件は100万人都市圏から車で2時間圏内とされる中、首都圏からの集客を望める好立地。一方で、同県内に限らず同距離圏内には多数のキャンプ場があるため差別化が一つの課題。



参考：『オートキャンプ白書2020』、社日本オートキャンプ協会

高まるグランピングやアウトドア体験を伴う宿泊の需要

近年、自らはキャンプを行わないけれども、アウトドア体験をしてみたいという方が多くなってきている。下記2019年の調査では45%の方がグランピングを認識しており、うち75%が実際に「行ったことがある」もしくは「行ってみたい」という回答をしている。(一社)全国グランピング協会によれば、国内市場規模は2022年1月時点で800~900億円程度と推定され、年々高まってきている。今回の計画では、より地域の魅力を高めるとともに、上記客層にリーチするための機能として期待される。

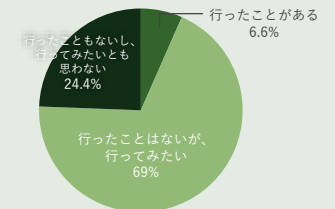


自然環境を活かした贅沢な屋外客室で宿泊



地域食材を活かした食事や環境を活かした体験を楽しむ

グランピングに行った経験 (n=455: グランピング認識者)



参考：『2019年キャンプに関する調査』、楽天インサイト編

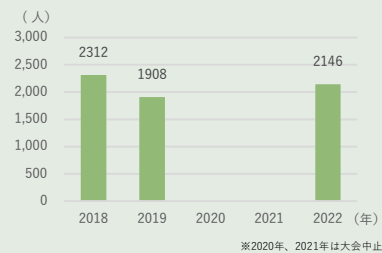
環境を活かしたコンテンツから、地域の注目度を高める

高まるジョギング・ランニング人口、各地マラソン大会も盛況

運動やフィットネスのメリットに対する意識の高まりにより、笹川スポーツ財団によるとコロナ禍ジョギング・ランニング人口は記録開始以降過去最高値（2020年時点）を記録している。世界的にもマラソン大会の人气が高まっており、都市の中を駆け抜ける大会や観光名所を巡る大会、自然環境を活かした大会など、地域ごとの特徴を活かした大会が選ばれる傾向にある。

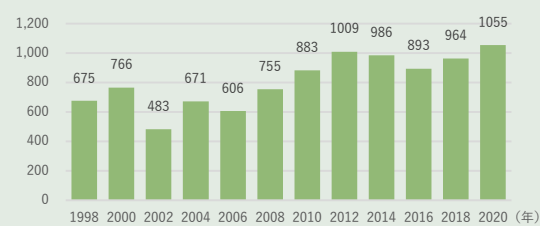
赤城山についても高地の気候と湖畔周辺の環境がランニングなどに適しており、一定数の方がランニングなどを行われていると同時に、赤城大沼・白樺マラソンも人気のイベントとなっている。ランニングなどを行いやすい環境の整備や情報発信を行うことによって地域の集客効果が高まる可能性も考えられる。

赤城大沼・白樺マラソン申込者数の推移



大会実施風景

ジョギング・ランニング推計実施人口の推移



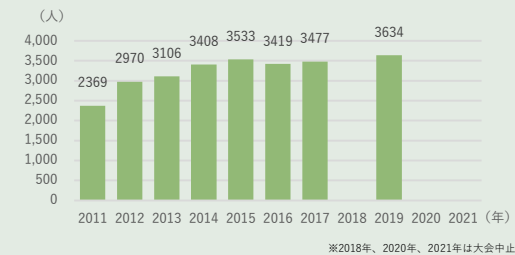
参考 上：『赤城大沼・白樺マラソン大会状況』、前橋市 下：『ジョギング・ランニング人口』、公益財団法人笹川スポーツ財団

ヒルクライム大会が人気を博して、関東の中での聖地化

自転車販売市場から見ても、コロナウィルス感染拡大と長期化が追い風となって移動手段やスポーツとしての需要が高まり、サイクリングなどを楽しむ方は増加傾向にある。ランニングと同様各地の大会も人气が高まっており、その中の一つのジャンルとして、特徴的な山岳地形とルートを持つ地域でヒルクライム大会が盛況している。

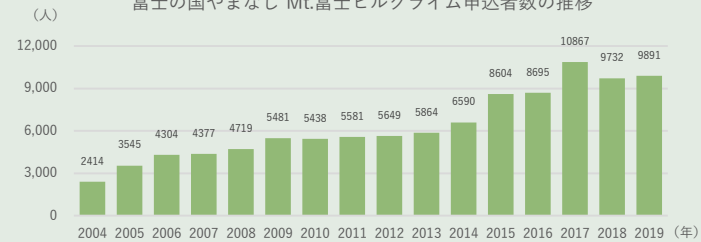
関東では榛名山と赤城山が人気のルートとなっており、まえばし赤城山ヒルクライム大会は年々参加者数も増やす状況にあり、前橋市をヒルクライムの聖地と呼ぶ声もある。特殊な需要に合わせて環境を整備していくことによって、地域の注目度を高めていく方法も有効だと考えられる。

まえばし赤城山ヒルクライム大会申込者数の推移



大会実施風景

富士の国やまなし Mt.富士ヒルクライム申込者数の推移



参考 上：『まえばし赤城山ヒルクライム大会参加者実績一覧』、前橋市 下：『エントリー者数の推移』、FUNRIDE presents 富士の国やまなし Mt.富士ヒルクライム

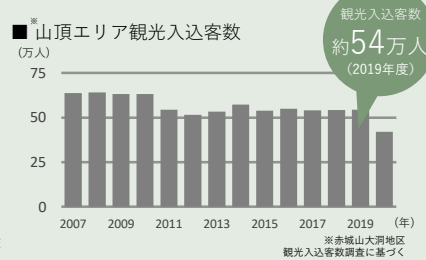
自然観光資源はあるものの、日帰り利用者が大多数を占め、時代変化の対応力が不足しており、地域経済が疲弊し公園存続の危機にある。

統計値からの分析

■ 山頂エリア宿泊客数 (2019年度) 観光入込客数調査に基づく
 約12.5万人 ※赤城山大洞地区

■ 旅行消費額 (2020年度) 観光庁 赤城自然塾DMO形成・確立計画より
 約12億円
 前橋市の観光入込客数は群馬県でトップクラスであるにも関わらず、延べ宿泊者数が少なく旅行消費額の増加につながらないことが課題

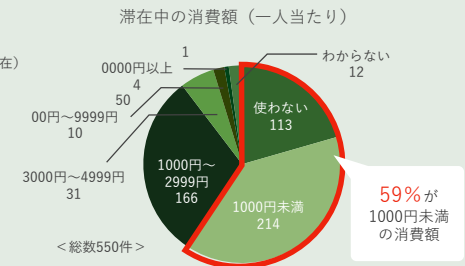
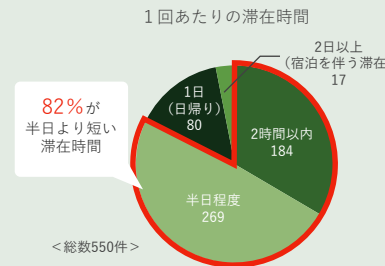
■ 公園内人口 (2022年4月現在)
 大洞地区 23世帯 34人



山頂エリア(赤城山大洞地区)の観光入込客数は、1996年頃までは100万人を超えていたが、その後観光客の減少傾向が続き、2011年～2019年は50万人台を推移。滞在の内訳も日帰り観光が中心となり、旅行消費額に繋がる宿泊客が少ない。今後も人口減少と共に更なる観光客の減少が見込まれる。

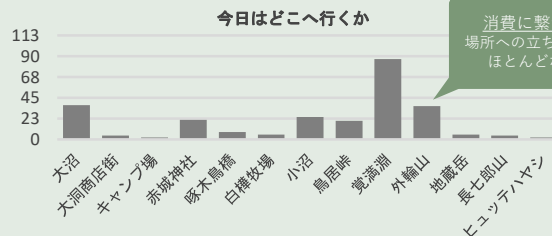
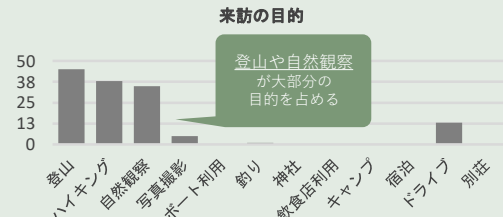
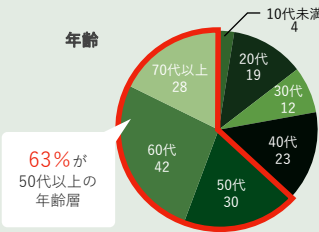
赤城山(県立赤城公園)の活性化に関するアンケート分析 (結果抜粋)

実施日：2021年12月1日～12月24日
 実施方法：一般公開リンクによるウェブフォーム形式アンケート
 回答数：601件



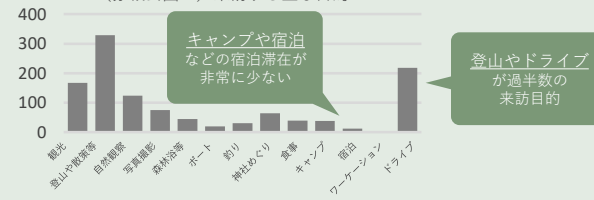
オープンハウス調査結果分析 (結果抜粋)

実施日：2021年10月21日～24日
 実施場所：赤城公園ビジターセンター前
 回答数：140件



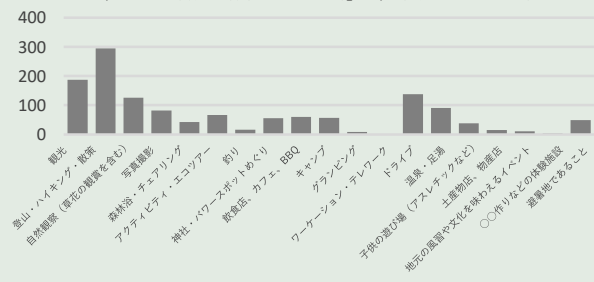
利用実態に近い調査結果から考察すると、季節や天候条件も影響していると考えられるが、利用者のほとんどが登山や自然観察を目的としており、年齢層は50代以上が半数を超え、利用者層の偏りが見られた。立ち寄りに関する質問でも、自然観光以外に消費に繋がる場所がほとんど上ならず、課題感が伺える。

(赤城公園へ) 来訪する主な目的



◆滞在時間と消費額について直接的な数値としても、宿泊滞りが行われていないことや、日帰り利用者がほとんど消費を行わずに立ち去ってしまっている実情が表れている。(上グラフより)

(好きな「自然を体験できる場所」へ) 来訪する主な目的



公園内の現状と課題

県立赤城公園エリアマップ



①赤城公園キャンプ場(県)

大沼湖畔の立地が魅力的な施設ではあるが、無人管理の不便さやルールが守られていない現実、またオートキャンプに対応していない設備面など、有効に活用されていない現状。



③文教施設地区・厚生施設団地(協会)

大沼湖畔に近い魅力的なエリアで、文教施設地区エリアと厚生施設団地エリアに分かれる。近年入居されていない敷地や廃屋が目立ってきており、立地を活用しきれていない印象が強い。



⑤赤城山総合観光案内所(前橋市)

公園の総合案内所として、地域に関する展示が魅力的に行われており、白樺牧場への景観も良好、飲食提供も有。立地が大沼から離れたため、他施設と運動しにくい。冬季閉鎖。



⑦赤城少年自然の家(前橋市)

少年自然の家として、林間学校の受入れイベント利用等、主に周辺の自然環境を活かした団体向けのプログラムを提供。体育館兼庭庫も持ち、地域でも活用されている。一方で一般利用は行われにくい。



⑨小沼(県)

長七郎山の火山活動でできた火口湖。春にはツツジなど、秋は紅葉と自然に囲われた魅力的なエリア。地蔵岳の登山口としても使用される。設備としてはバイオトイレのみ設置。



②赤城公園ビジターセンター及び赤城山第三スキー場(県)

通年オープンしており、覚満淵や各山への登山口も近いことから、出発拠点となる施設。一方で展示室などは機能しておらず、トイレのみの利用が目立っている。暗い印象を受けるとの声も聞かれる。



④赤城公園テニスコート(県)

時間貸のコートだが、近年需要が減少してしまっただけ閉鎖中。覚満淵とビジターセンターをつなぐ立地で雰囲気にも影響するため、積極的な活用方法が求められる施設。



⑥大沼商店街(県、一部民地あり)

大沼湖畔で、赤城神社、覚満淵や黒楡山に近接する場所に位置し、山頂エリアの賑わい中心地である一方、年数が経過した施設も多くっており「印象が暗い」というアンケート結果も見られた。景観面も含め、活性化に向けた検討も求められる。



⑧鳥居峠(前橋市側：県、桐生市側：国有林)

関東平野や赤城山頂エリアを望める魅力的な立地。旧山頂駅はレストランとお土産屋として活用されている。アクセスのよさと展望を活かして赤城の魅力をより発信していける場所。



⑩覚満淵(県)

周囲約1kmの小さな湿原で、湿生植物と高山植物の宝庫。ビジターセンターから近く、1周する木道も整備もされていることから多くの方が自然観察に訪れる景勝地兼目的地。

※()内は、施設や区域の管理者 / 「協会」は「群馬県観光物産国際協会」

⇒各施設の利活用方法を見直し、エリアの活性化

地元住民が感じている魅力と伝えたいこと

第1回あかぎ会議

会議概要

本事業やスローシティ構想についての説明を実施した後、赤城公園の魅力について、地元住民の皆さんとワークショップを実施

日付：2021年11月8日 14：30～17：50

場所：ヒュッテハヤシカフェ

参加：地元住民や事業者 27名
群馬県（主催）、前橋市、コーディネーター茂木氏、
トークグラフィッカー山口氏、技研コンサル(株)、
(株)スノーピーク地方創生コンサルティング



ワークショップ実施風景

ワークショップ内容

- ・テーマを変えながら意見を出し合う
- ・グラフィック化して魅力と課題を整理

テーマ

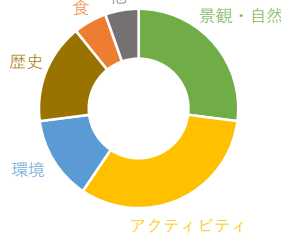
- ・私が感じている“いま”の赤城公園の魅力
- ・私が利用者から聞いている赤城公園の魅力



ワークショップ結果（山口氏イラスト）

■赤城公園の魅力

- ・体育館が使え
・無料楽しめる
- ・ワカサギ料理
・山菜ラーメンが普通にうまい
- ・赤城山の盛り立ちや歴史背景
・むかしの恋の伝説
・赤城神社の伝説
・文豪の愛の舞（詩・小説）
・作品の舞台（詩・小説・漫画）
- ・遊ばし
・高橋トレーニングに最適
・ゆつたり遊べる
・（子供）手芸・クラフト
・しずかな時間帯の湖畔のきれいさ



- ・本沼の鏡面反射
・高層塔からの眺望や朝日
・歴史（スライクローランド十山）
・温泉（天の川がよくなる赤城山）
・ダイヤモンドダスト
・雪海
・高層塔の暮る景色やフォトスポット
・（手紅葉、つじ、紅葉、霧氷）
・家や自然の魅力を
・花の種類多さ
- ・ハイジのブランコ
・本祭り体験
・高層塔の眺望（高層度高め）
・大沼湖を渡るフェリー
・湖畔でBBQ
・スノーシュー体験
・スノーシュー体験をばせられる
・雪害や山火
・湖畔面でのランニング

第1回あかぎ会議ワークショップ結果概要

⇒ 赤城公園の魅力や特色を整理

第2回あかぎ会議

会議概要

第1回会議結果を踏まえた構想進捗の説明とテントサウナ体験を実施後、ワークショップにて滞在に関する提案方法を検討

日付：2021年12月20日 12：30～15：30

場所：前橋市赤城自然少年の家

参加：地元住民や事業者 27名
群馬県（主催）、前橋市、
（株）スノーピーク地方創生コンサルティング



テントサウナ体験実施風景

ワークショップ内容

- ・設定に合わせて、各チームごとに体験してもらいたいことを滞在プラン化

課題設定

- ・滞在期間：2泊3日以上
- ・季節：春夏秋冬
- ・ペルソナ：40代夫婦＋小学生2名 / 20代カップル



ワークショップ実施風景



40代夫婦＋小学生2名

大人も子供も体験！
わくドキ春の赤城山
プラン

POINT

- ・E-Bikeで巡るつつじや新緑の旬スポット
- ・鳥居峠でご来光体験
- ・地蔵岳でアスビューを展望
- ・大沼でカヤック体験



40代夫婦＋小学生2名

五感で体験！
専用コンシェルジュ監修
赤城山グランピング

POINT

- ・インストラクター指導によるクワガタ取り
- ・涼しい高地気候の中で女子ヨガ体験
- ・シェフ提供地産地消BBQ
- ・親と子で分かれて過ごすワーケーション滞在



20代カップル

秋の絶景を満喫、
二人の時間を楽しむ
プロポーズ大作戦

POINT

- ・白樺牧場で紅葉狩り絶景ツアー
- ・大沼湖畔でチェアリング
- ・BBQホールでプライベートディナー＆夜景パバー
- ・流星群を眺めるナイトハイク



20代カップル

2泊3日首都圏発
天空の“ときめく”
グランピングキャンプ

POINT

- ・ダイヤモンドダスト体験
- ・湖上でワカサギ釣り＆コーヒーブレイク
- ・寛み浴で動物の足跡を探るスノーシュー体験
- ・日本一小さいスキー場でそり体験

第2回あかぎ会議ワークショップ結果概要

⇒ 滞在時間延長のための具体案を検討

自然環境団体や専門家、パブリックコメントの意見

第1回あかぎ環境会議

基本構想案について説明を実施した上で、専門家や地域で活動されている団体の皆さんとワークショップを2回に分けて実施

日付：2022年5月12日 ①9：00～12：00 ②13：00～16：00

場所：県立赤城公園ビジターセンター

参加：自然環境団体：8団体、18名

群馬県（主催）、前橋市、コーディネーター茂木氏、

技研コンサル(株)、

(株)スノーピーク地方創生コンサルティング

見学 (株)JTQ、(株)成瀬・猪熊建築設計事務所

ワークショップ内容

- ・基本構想についての意見交換
- ・各団体ごとに赤城公園のあるべき姿への意見や理由を記入いただき、マップを作成。



ワークショップ実施風景

自然環境調査

本調査は、調査範囲の植物相調査を行い、希少種の分布を把握することで県立赤城公園における整備計画の基礎資料を作成

調査方法：・現地を踏査し、調査範囲や危険箇所などの現地状況を把握

- ・現地を調査し、目視で確認された維管束植物の植物リストを調査範囲ごとに作成する。
- ・有識者ヒアリングを実施し、希少種の育成状況や調査結果の妥当性について意見を収集する。



現地調査状況

意見交換・自然環境調査により、赤城公園内のエリア分けの必要性を再確認

パブリックコメント

令和4年2月14日～3月15日の30日間、基本構想案を公表し、パブリックコメントを実施。

137名の方々からの貴重な意見をいただき、赤城公園への想いを受けとめ、基本構想を見直し。

基本構想に求められる機能と利活用エリアの確認

赤城公園に求められる機能整理

赤城公園の機能を整理し、機能系統図に一覧化。

別添資料 令和3年度赤城公園の機能系統図整理より

赤城公園の機能整理

- 非日常を与える
- きれいな光景を見せる
- アクティビティを増やす
- 情報を広げる
- イメージを明るくする
- 新たな魅力をつくる
- 学びの場を創出する
- 健康を促進する

- 回遊を促す
- 宿泊客を増やす
- 滞在空間を増やす
- 快適な環境を増やす
- 参画しやすい環境をつくる
- 雇用を生み出す
- 労働環境を整える

- 重点保全エリアを指定する
- EV環境を整える

求められる機能

情報発信・観光案内
機能の整備
(ビジターセンター等)

体験型宿泊機能の整備
(キャンプ場・グランピング等)

体験を取りまとめる団体や
事業者が参画しやすい仕組み
の整備

自然環境の保全及び景観形成
手法の整備



方針

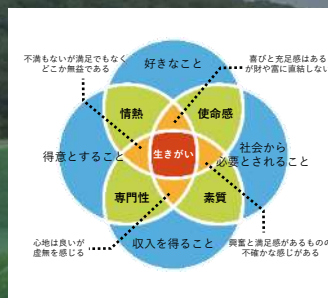
既に開発されているエリア (図上：利活用エリア) での施設整備を検討

考察 — 生きがいやWell-Beingなど、これからの共感価値を取り込み
県立赤城公園が秘める可能性をアピール、
持続性や幸福度を引き上げていく。



#Well-Being

心身ともに
バランスを整え、
より良い日常を探索する



#生きがい

生きることに
価値や意味をもたらす
日本の哲学



#Green&Relax

自然と共生することで
知的生産性を
向上させる

取り入れるべき新しい価値観

自然環境の保全・保護に配慮した利活用を図ることで、
公園の魅力を引き出し、県民の関心を高める施策を構築する。

構想ビジョン

Akagi Well-Ground

赤城ウェルグラウンド

県立赤城公園の「自然」を中心にしたまちづくり。
特別な体験を醸成することで、持続性や幸福度を向上させ、
幅広い世代が集まり、地域の魅力を高める場を創造していく。

#nature #authentic #community #neighborhood #workcation #wellbeing
#lifestyle #mindfulness #camp #glamping #canoe #hike #cafe



Akagi Well-Ground

赤城公園全体を巻き込み、自然を保全・保護しつつ、既存施設のリニューアルと新たな価値の創造による活性化、にぎわい・滞在・交流・体験・教育の創出に寄与していく。

ソフト・ハード両軸から実現する持続型循環の創出

地域・公園施設としての持続型循環の創出

地域としての課題

- ①目的地となるための魅力化、交流人口増加
- ②周遊を促す過ごし方の提案、滞在時間を延ばす
- ③新規事業者の参画しやすい環境や仕組みの整備
- ④元ある自然環境を保全しながら活用すること

公園施設としての課題

- ①多様化するニーズへの対応
- ②公園運営管理の人員不足・新たな担い手の確保
- ③老朽化施設・遊休施設の再整備や活用
- ④維持管理財源の確保

ウェルグラウンド 赤城 Well-Ground 構想

～自然を中心として、幅広い世代が集まり、地域の魅力を高める場を創造～

管理・運営ほか（ソフト施策）

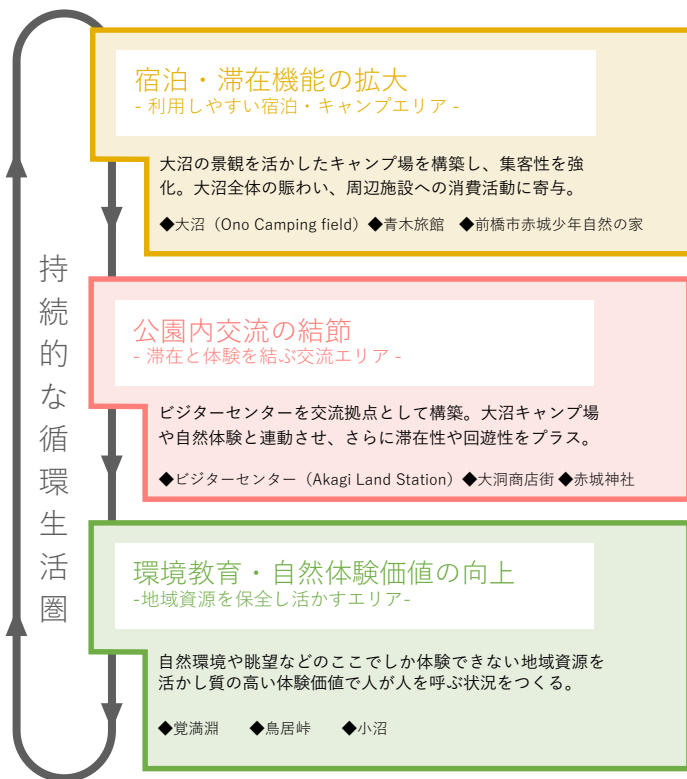
- I. 循環型の自立生活圏を創出
→地域全体の回遊による地域経済の基盤化
→Well-beingな持続可能コミュニティの可視化
- II. スマート文化経済圏の創造
→データ連携から地域文脈を活かしたマーケティングによる活性化
- III. 官民共創プラットフォームの構築
→新たな民間事業者が参画しやすい環境整備
住む人+働く人（民間事業者含む）による新たな枠組みの構築
→住む人+働く人による地域マイスター制度
→住む人+働く人による滞在方法を提案する仕組み

施設整備（ハード施策）

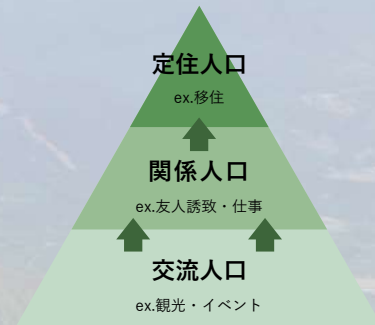
- i. 遊休エリア（文教施設地区・厚生施設団地）の活性化
→体験型宿泊機能の整備
- ii. ビジターセンターの再整備
→情報発信・観光案内機能を強化し地域周遊の窓口にする

サステナビリティ × ウェルビーイング 地域全体の回遊による 地域経済の基盤化

新たな「場」の相互作用によって、山頂エリア全体に回遊性が生まれ、滞在時間が延びることで、公園内の消費活動に寄与。自然と人が有機的に交わり変化し続け、「**循環型の地域経済を基盤化**」させるだけでなく、住む人・働く人・訪れる人の「**三方善し**」を構築し、公園内や周辺地域の活性化につながる。エリア分けによる自然環境の保全・保護をはかり、公園内の持続的な循環を最大化させる。



Well-beingな持続可能コミュニティの可視化



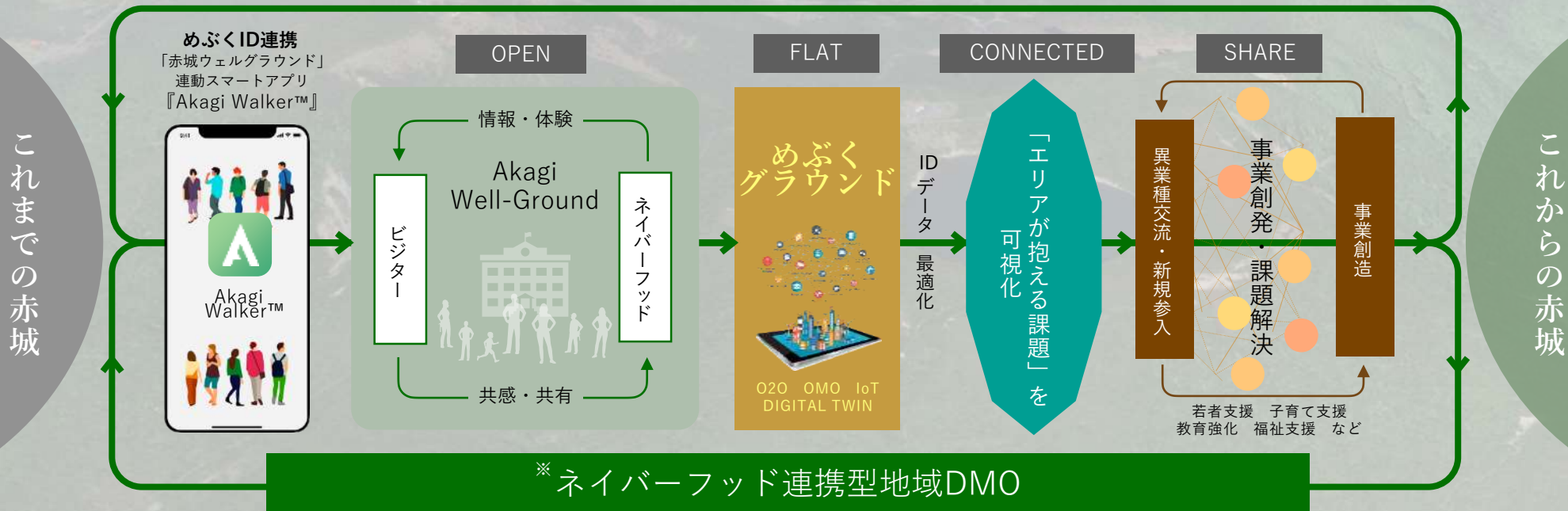
交流から関係へ。地域の知見を活かし、コミュニティを醸成していく。

循環型自立生活圏構想では、既存の環境を「なくてはならない場所」として発展させ、

その地域における住む人・働く人・訪れる人によって、付加価値のある経済循環を構築する。

地域に潜在するポテンシャルを引き出し、人流を活性化させ、新たな出会いや就労機会を生み出していく。

リアル行動に基づいたデータフィードバック・Well-Beingな持続可能コミュニティを可視化



※ ネイバーフッド… 近所, 近隣, 町内。また、近隣のよしみ, 近所づきあい。 出典：プログレッシブ英和中辞典(小学館)

※内容は構想段階のものであり、今後の調整により変更になる可能性があります

データ連携から地域文脈を活かしたマーケティングによる活性化

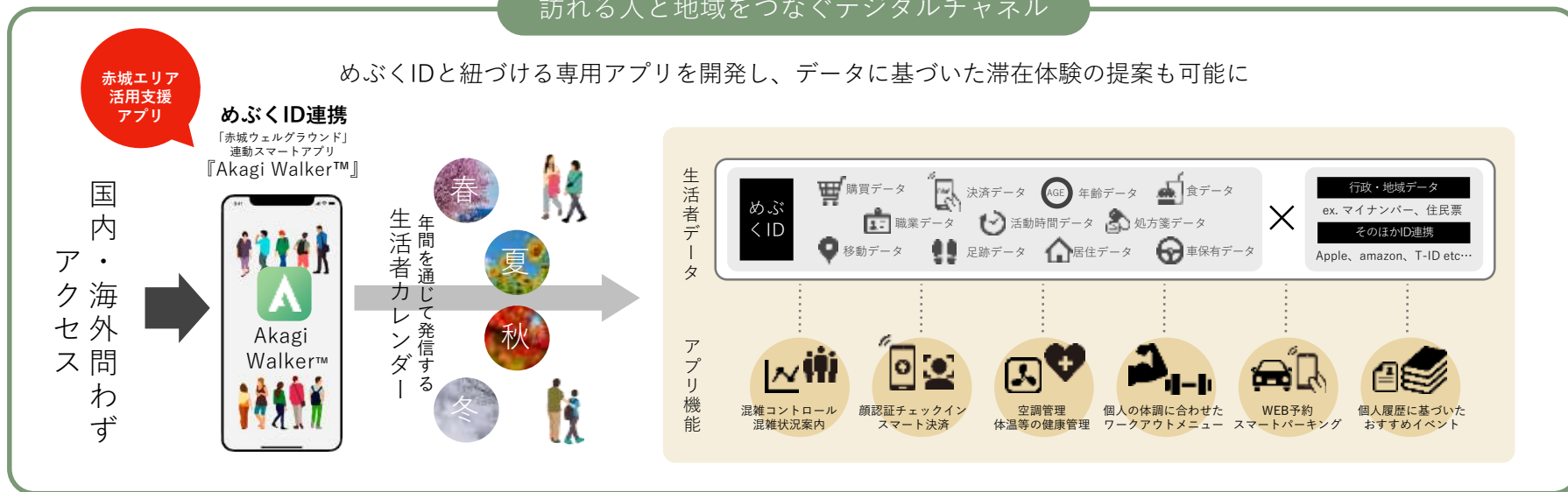
地域と市民がともにデータを育み、価値還元を生み出す拡張型プラットフォーム。「個人のライフスタイル」と、それを取り巻く「社会」をむすび、テクノロジーとアイデアで価値ある「情報」に磨きあげ、社会に届けることで新しい喜びを提案する。前橋市が推し進める「めぶくID」と連携。提供される様々なサービスを通し、その利益を地域社会に還元していく。

※ オプトイン率増
(市民参加)

ID連携による
地域データの
完全可視化

訪れる人
に応じた
観光シナリオの
提案が可能に

訪れる人と地域をつなぐデジタルチャネル



Akagi Well-Ground × 地域文脈を活かしたマーケティングによる活性化

※オプトイン…活動や団体に対して、参加、加入するという意味。“選ぶ”や“決める”を意味する“opt”に、“入る”を意味する“in”がついた形。 出典：一般財団法人インターネット協会

※内容は構想段階のものであり、今後の調整により変更になる可能性があります

地域連携 ①

新たな民間事業者が参画しやすい環境整備 住む人+働く人（民間事業者含む）による新たな枠組みの構築

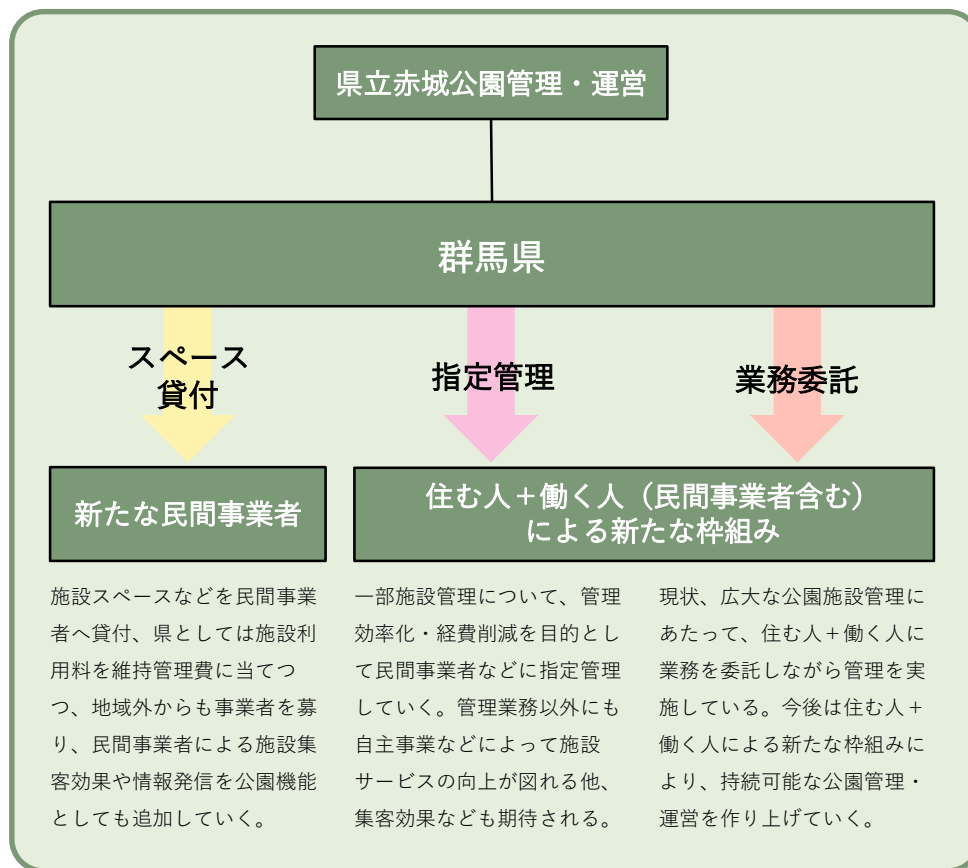
すでに取り組みされている官民連携プロジェクトをはじめ、公園管理の中でも指定管理やスペース貸付などの制度整備を行いながら、公園内にて新たな民間事業者が事業参画しやすい環境を整えていく。マンパワーや財源の不足解消などの課題解決を図るとともに、訪れる人の満足度や幸福度の向上に繋げていく。



訪れる人の滞在時間を延ばすために、これまでにないアクティビティ事業者など、民間プレイヤーの参画がしやすい環境を整えていく。

参入ルール例：

- ・新たに地域の魅力を創出し、地域にとっての新規顧客を呼び込める事業者
- ・県立公園を愛し、地元事業者や関係団体等と連携・協力できること



地域連携 ②

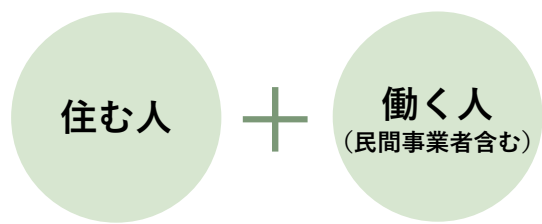
住む人+働く人による地域マイスター制度



赤城公園キャンプ場とビジターセンターにおける、滞在空間・情報発信の機能を再整備。
 地域に密着している住む人+働く人だからこそ知っている体験をプラン化し、
 季節・時間・天候などによって変化する周辺状況を踏まえた、エリアでの過ごし方を提案する。

エリアでの周遊を促すプラットフォーム整備

施設管理を通して
連携を具体化



エリアへ
実装



地域連携 ③

エリアでの周遊を促す体験プラットフォーム

住む人+働く人による 滞在方法を提案する仕組み

ビジターセンターをはじめとした各拠点にて、地域のマイスターを配置し、その時期の旬に合わせて場所・ルート・時間帯・持ち物など、おすすめの滞在方法をご提案。滞在手段から、レンタルサービスやアクティビティメニューまで用意することでバリエーションを持たせながら用意。

現地にいるからこそ知っている情報をもとに、訪れる人に合わせた赤城山の楽しみを伝え、エリアでの周遊や消費を促していく。

■プランパッケージイメージ

覚満淵～大沼を巡るスノートレッキングプラン

体験レンタルバック + 地域飲食店のランチセット + 温浴施設入浴券 + 地域商品券

セット価格 | 1名様 ¥7,000 | 2名様 ¥12,000

自然体験似合わせて、大洞商店街をはじめとした地域施設の利用を促すサービスを掛け合わせることで周遊プランを構成、地域への消費へつなげていく。

■ルートマップイメージ (ホワイトシーズン)



■タイムテーブルイメージ



画像提供：前橋観光コンベンション協会

体験宿泊施設の整備

赤城公園エリアで、
自然に囲まれた大沼に面する
特別な湖畔キャンプフィールド。

Ono Camping field

大沼キャンピングフィールド

赤城大沼のすばらしさを感じられる特別な湖畔キャンプサイトを整備。野遊び体験を通じて、山頂エリア北西部の集客拠点を構築。リピーターの多い安心感のある場所を創出する。

整備概要

- キャンプサイト（100サイト以上）：民営有料で管理人常駐
- 管理棟：宿泊受付、アウトドア用品・食料品・レンタル品などを提供
- サニタリー棟：炊事場、トイレ、シャワー等を完備
- 電源設備とWi-Fi環境を利用した多様なデジタルコンテンツ
- 施設規模に合わせた駐車場

整備想定エリア

県立赤城公園キャンプ場、文教施設地区・厚生施設団地など



情報発信・観光案内機能を強化し地域周遊の窓口

「買う・遊ぶ・食べる・泊まる」が揃う
赤城公園エリアのアウトサイドベース。
地域店舗や住民を巻き込む拠点施設。

Akagi Land Station

赤城ランドステーション

赤城公園のコミュニティ基盤となる拠点施設。さまざまなアクティビティ、イベントを通じて、大沼小沼にとどまらず、赤城公園エリア全体の回遊性に寄与。観光案内機能・飲食機能も内包し、強い発信性・集客性を生み出していく。

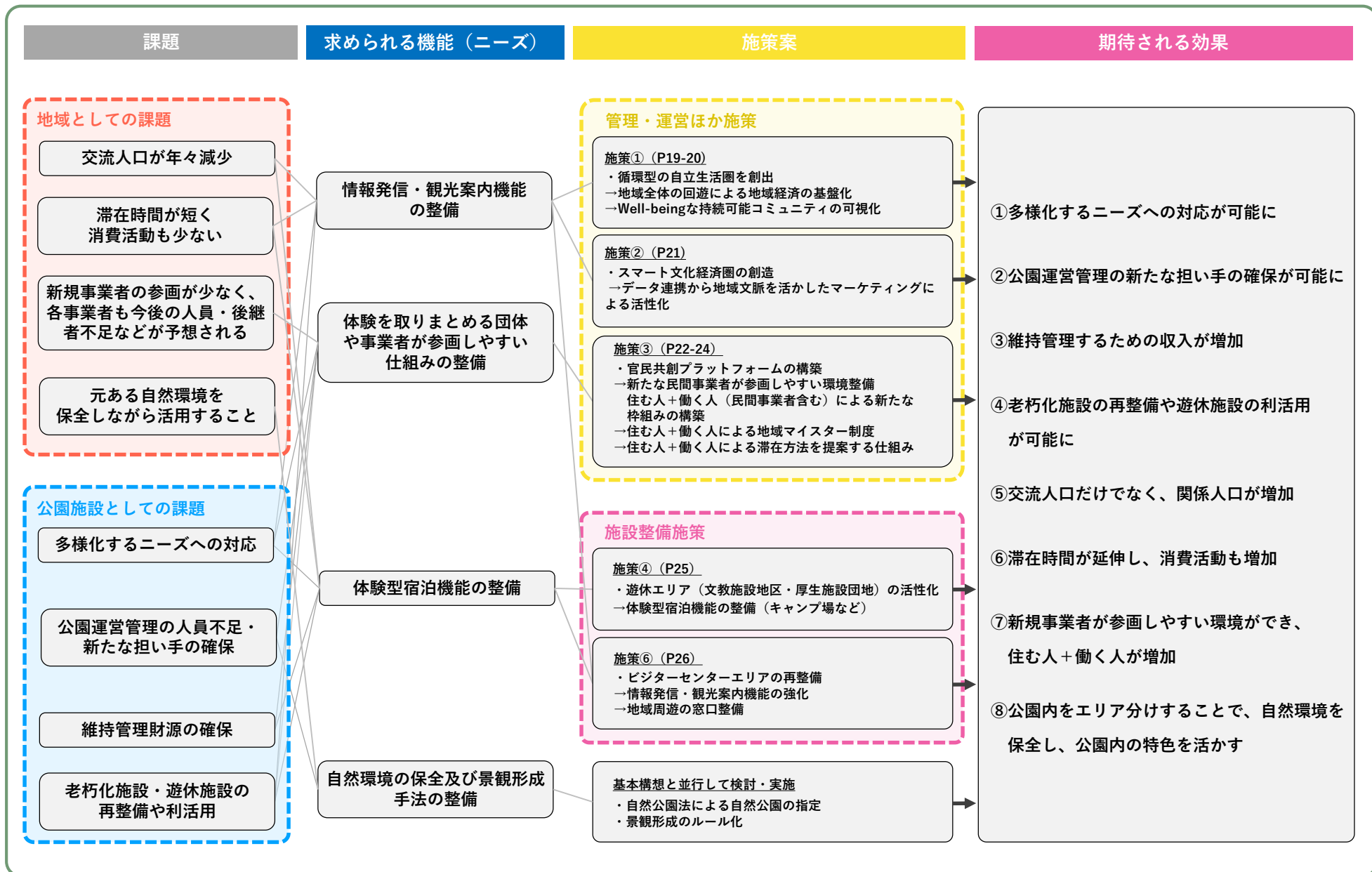
整備概要

- 観光案内やアクティビティ体験などの総合受付窓口の開設
- 赤城地域の地場産品を備えたショップ・カフェ
- Wi-Fi環境を整えたコワーキングスペース
- 快適に利用できるトイレ（男性・女性・バリアフリー）
- 新たな目的を創出する温浴施設や体験型宿泊施設なども検討

整備想定エリア

- ・県立赤城公園ビジターセンター
- ・テニスコート跡地、赤城山第三スキー場など





構想実現に向けた展開と計画

今後、赤城ウェルグラウンド構想の実現に向けて、段階を分けることで全体計画の内容を高めていくとともに、民間参画だけではなく民間投資も獲得しつつ拠点整備・公園運営・管理を実施していく。

< 想定される段階分けと内訳 >

PHASE

1

(第一段階)

官民共創による拠点施設の整備

- ・ 既存施設（赤城公園キャンプ場、赤城公園ビジターセンター）の再整備とそれに伴う新たな価値の創造
- ・ 自然環境の保全及び景観形成手法の検討
- ・ 新たなプレイヤーの参画（民間事業者・民間プレイヤー）

PHASE

2

(第二段階)

官民共創の進化による新たな価値の創造と機能拡張

- ・ 第一段階整備と連動した公園機能の拡張（テニスコート、第三スキー場などの活用）
- ・ 自然環境の保全及び景観形成手法の確立
- ・ 新たなプレイヤーの参画（民間事業者・民間プレイヤー）と整備に伴う民間投資の獲得

PHASE

3

(第三段階)

官民共創による公園運営・管理モデルの実施

- ・ エリア全体の更なる魅力化に向けた追加的整備
- ・ 自然環境の保全及び景観形成手法の実施
- ・ 新たな維持管理・運営手法の確立

ウェルグラウンド
赤城 Well-Ground 構想の実現

循環に繋がる収支へ

地域への経済波及効果を高めつつ、持続可能な公園管理・運営を目指す。また、民間事業者が参入しやすい環境を整備し、交流人口の増加と経済波及効果への循環を生み出す。

■想定交流人口増と経済波及効果の算出（群馬県全体）



キャンプ場等利用
(日帰り1.5万人
宿泊3.5万人)

ビジターセンター利用
(日帰り3万人)

イベント・体験利用
(日帰り2万人)

日帰り客 6.5万人 → 2.7 億円

宿泊客 3.5万人 → 8.1 億円 (宿泊費含)

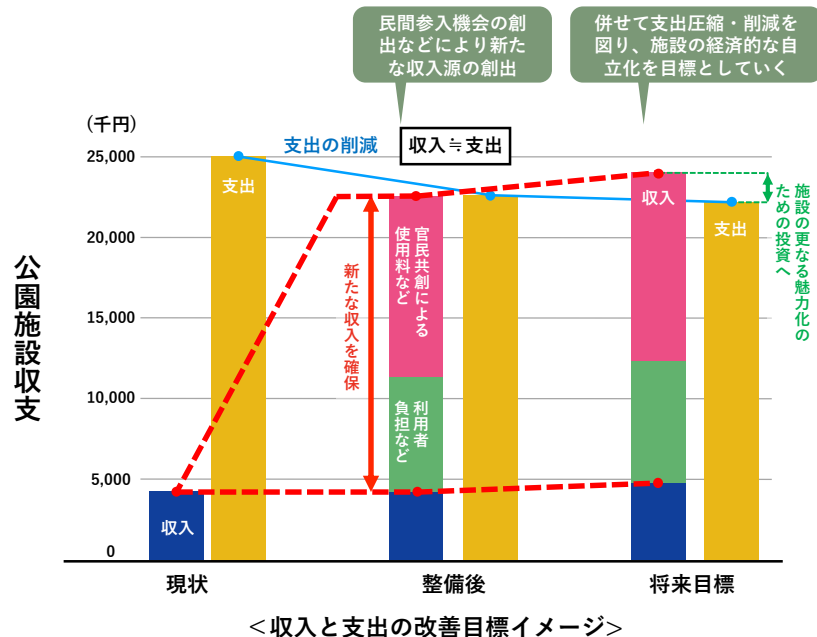
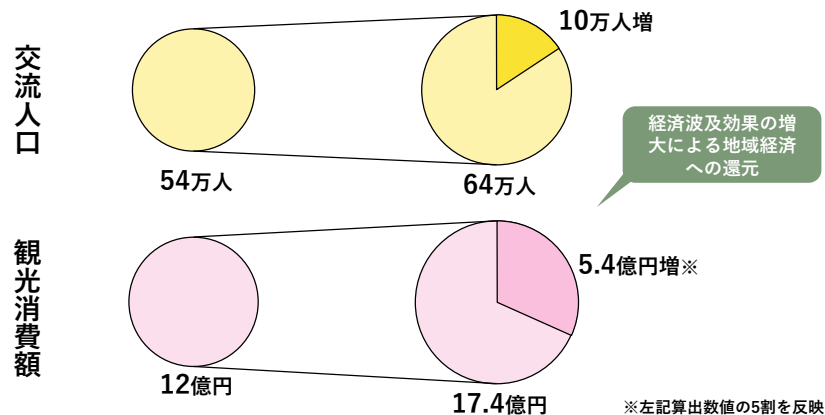
参考：群馬県観光動態実績値

日帰り客消費額平均： 4,109円/人
宿泊客消費額平均： 23,202円/人

※「令和元年度群馬県観光動態調査」より

計 **10.8**億円

望ましい収支計画イメージ



現状交流人口・観光消費額数値：2019年度・2020年度観光庁 赤城自然塾DMO形成・確立計画より

赤城公園・大沼大自然エリアを 未来史産に。

未来史産を次の世代に残すため、
持続性・発展性を想定した「Akagi Well-Ground」構想。
「新・群馬県総合計画」や「デジタルグリーンシティ前橋」と連携を果たし、前橋市街・敷島公園・赤城山の3エリアの持続性や幸福度を高め、生涯学び、育ち、新たな価値がめぶくまちとして日本レジリエンスのモデルエリアと受け継がれいく。
未来につながるプロジェクトであり、群馬県全体の関係人口の増加を図るプロジェクトのかなめを担う企画となる。



別添資料

参考資料：赤城公園の機能系統図整理

赤城公園の機能系統図

求められる機能

